

狭い世界、広い過去

——『カタロニア讃歌』『空気を求めて』——

照屋佳男

一 はじめに

ジョージ・オーウェルの『一九八四年』で注意を惹かれる言葉の一つに、「過去の方が大事なのです⁽¹⁾」というのがある。そう言っているのは全体主義国オウシアニアの党幹部の一人、オブライエンなる人物であるが、真っ当な感覚や常識から凡そ縁遠いところにいるこの人物が、真っ当な感覚を代表してみせているのは、たしかに興味深い事で、この種の言葉は、誰の口から発せられるにせよ、その深い意味合いを失うものではない。この場合オブライエンが主人公に向かって何を祝して乾杯しましょうか、未来を祝して乾杯しましょうかと訊ねたのに対し、過去を祝して乾杯しましょうと主人公が答えたのを受けて、「過去の方が大事なのです」と言ったのである。

未来よりも過去の方を大事だとしたオーウェルの態度に、何等曖昧なもの無かった事を、我々は認めざるを得ない。アメリカの哲学者ロバート・ニスベットは、「自由の不可欠の土台と看做された過去⁽²⁾」という言い回しで、

オーウェルの過去の意識に触れ、全体主義体制の存続にとって必須なものは、過去の歪曲と払拭であると述べたのだが、過去に対して適切に想像力を働かせ、過去を上手に思い出すのを重要だとしたオーウェルは、疑いもなく過去（或いは過去の意識）と自由との間に切っても切れぬ関係の存する事を見抜いていた。社会主義者オーウェルがある種の社会主義者、即ち懐旧の念を抱く事自体に異端の臭いを嗅ぎつける社会主義者に重大な疑念を呈するところに不思議はない、という事になるわけで、オーウェルにとっては、過去の蔑視の上に成り立つ社会主義は、社会を完全無欠なものにし得るとする信仰、即ち地上の天国（ユートピア）信仰の産物に他ならなかったのだが、そのユートピア信仰ほど人間性に悖るものもないというのは、動かしようのない事実だったのである。そういう彼の考え方は、「地上の天国を築こうとしたまさに、⁽³⁾故に、我々はいま悪夢の世界に棲んでいる」という言葉、或いは「神を恐れぬところに知恵はない、しかしいま誰も神を恐れてはいない、故に知恵も無い」⁽⁴⁾という三段論法に示されているはずだが、いついかなる時代においても人間社会には解決不能の「根本的な問題」が付き纏うという彼の見方は、無論、人間は生れながら善であるとするロマン主義的見方の否定に発するものだ。それは、彼がリベラリズムの眉唾物の信条の一つとして、「人間は生れながら善であり、ただ環境によってのみ墮落させられる」というのを挙げているところからも推察出来るのであり、反ロマン主義者オーウェルは、「人間は本質的に邪悪であり、人間が何か価値あるものを為し遂げるとしたら、それは鍛錬——倫理的、政治的な鍛錬——を経た場合に限られる」⁽⁵⁾と言った時のT・E・ヒュームからかけ離れた所にいたわけではない、いや、オーウェルはヒュームから影響を受けたとさえ言い得るのだ。『牧師の娘』(A Clergyman's Daughter, 1935)を仔細に読めば分る通り、ヒュームが「生の悲劇的意義」の感得される場とした「人間的な平面」⁽⁶⁾即ち、完璧を具えた神の領域から峻別された平

面、様々な方向に道が放射状に伸びはしていても、その道が悉く塞がれた平面、即ち限定されてあるのを本質的な特徴とした平面に、オーウェルはむしろ居心地のよさを感じ取り、充足や自由を覚えていた。オーウェルは「人は、人生の目的は幸福であるなどと思い込まない時に、幸福であり得る」とも言ったのだが、これは、ヒュームの発言、即ち「秩序は単に否定的なものではなく、創造的なものであり、自由促進的なものである。制度は必要である」という発言との類似を我々に思い起させる。オーウェルとヒュームの間に、類似性が存するのは疑い得ぬところだが、ただオーウェルの場合、限定されてある世界、狭い世界は、過去、思い出となって甦る過去に通じてい、その点でヒュームとは異なるのである。

二 「前線」と「銃後」

『空気を求めて』(Coming Up for Air, 1939)は、過去への愛着を主題にしている点で、特筆大書すべき作品であるが、過去への愛着と並んで、そしてそれと密着な関係のあるものとして、世界を狭く限ろうとする態度が、この作品で正面から打ち出されている事に、まず読者の注意は引き寄せられる。世界を狭く限ろうとする態度について言えば、これは『空気を求めて』に先立つ作品『カタロニア讃歌』(Homage to Catalonia, 1938)においても明瞭に示されているので、まず後者を取り上げる事にしよう。

歴史家ヒュー・トマスが述べている通り、スペイン内乱について夥しい書物が書かれはしたが、「それだけを独立させて注意深く読むに値する本は半ダースくらいで、その半ダースの中で最良のものは『カタロニア讃歌』であ

(8) オールウェルは、たしかに、体験したところを驚くほど誠実に記録しているのだが、ハーバート・マッシュウズは「オールウェルはスペインの一隅で、内乱のほんの一部を経験したに過ぎぬ」という表現で、オールウェルの政治的視野の狭さを示唆し、「これをその文学的価値の故に読めば、得るところの多い経験となるが、歴史として読めば誤解に陥るか、混乱に陥るかするだろう。」⁽⁹⁾と言っている。なるほどそんな風に読めたら、それに越した事はないだろう。しかし『カタロニア讃歌』の文学作品としての価値は、スペイン内乱に関するオールウェルの政治的な記述から切り離しては論じられないのだ。切り離されたら、『カタロニア讃歌』の傑作たる所以は見失われてしまう事になるだろうし、またオールウェルが『カタロニア讃歌』で難じているような虚偽への加担に道を開く事にもなるだろう。私は、文学作品としてなどと殊更に身構えずに、次作『空気を求めて』と密接な繋がりのある作品として読めば、得るところが多いと考える。そして、そういうふうに読めば内乱のさなかのスペインの「前線」と「銃後」のコントラストがただならぬ意味を帯びて浮び上ってくる筈である。

一九三六年十二月、オールウェルはイギリスの新聞に何か記事でも書くつもりで、イギリスの独立労働党の紹介状を手に、スペインへの旅に出かける。スペインに到着して彼が腰を落ち着けたところは、カタロニア地方のバルセロナだったのだが、そのバルセロナでは、アナキストやトロツキスト系の政党や労働組合がその年六月の「反乱」以来ずっと優勢を保ち、革命的諸施策を実行に移していた。かくして生じた雰囲気、万人平等の社会の実現の如き、あるべき社会主義の端緒の如きバルセロナの雰囲気はオールウェルに一生忘れ得ぬ強烈な印象を与えるのだが、この革命的雰囲気は、オールウェルには、スペイン土着のものに発していると思われていたのだ。実際、オールウェルはアナキズムはスペインに土着のものだと言っているのであって、してみると、アナキスト主導の「革

命」は、スペインの風土に根差したものであるより他はなく、スペインの風土に根差している限り、そこに空疎なもの、手応え無きもの入り込む余地は無いという事になる。そして手応えあるものがオーウエルの内部でひどく目方のかかるものとなっていた一事を考慮に入れると、バルセロナの第一印象が無視出来ぬ意味を帯びるのは、怪しむに足りない。それは兎も角、バルセロナの革命的雰囲気感動し魅了されたオーウエルは、遅疑なく民兵団に加わる決心をするのだが、彼が独立労働党の紹介状を携行していた事は、彼の意志とは係りなく、彼がトロツキスト系と目される民兵団に入るのを不可避にした。かくて、凡そ訓練とは言えぬ原始的な訓練を受け、貧弱極まる装備を施された後、オーウエルの民兵団はアラゴン戦線へ向い、その戦線で翌年（一九三七年）四月まで、約四か月（百十五日間とオーウエルは正確に記す）塹壕生活を送る次第となる。それからオーウエルは、休養のため「銃後」のバルセロナに戻り、そこで忌わしい内紛、即ちソ連の援助と指導を受けて今や優勢となっていたコミュニスト系の勢力と非コミュニストの左翼民兵団・政党・労働組合との間に生じた市街戦に巻き込まれ、不毛極まる二週間を過す。その後再び前線に赴くのだが、数日後、不注意にも、曙を背景に塹壕の上にくっきりと身体を浮び上らせたオーウエルは、フアシストの恰好の標的となり、喉に弾丸を受け、戦闘不能の状態に陥り、担架で銃後の病院に運ばれる事になる。病院を転々とした挙句、バルセロナに辿り着いてみると、折からバルセロナでは、「異端狩り」（アナキストやトロツキスト及びその疑いありとされた人間や組織に対する弾圧）が猖獗を極めている。「異端狩り」の主体は、コミュニストに主導権を握られるに至った共和政府そのものである。オーウエルの属していた民兵団を下部組織としていた小政党ポウム（P・O・U・M＝マルクス主義統一労働党）は非合法化され、ポウムの指導者は無論の事、ポウムと係りありと看做された民兵も片端から逮捕され、裁判抜きで投獄され、

獄中で死に至らしめられる者、消息不明となる者などが続出する。オーウェル自身も官憲に追われる身となり、一九三七年六月、間一髪というきわどいところを仏西国境を越え、フランスに逃れる始末となる。以上は、スペインにおけるオーウェルの体験を概略的になぞったものだが、オーウェルが「休養」(実際は市街戦勃発のため休養とはなりえなかったのだが)の期間をはさんで二度過した前線での生活は、注意して眺めると、あらゆる困窮や不快事や不便や危険にも拘らず、手応えある充実した生活となっていた事が疑いを入れる余地のないものとなる。塹壕を核としたまことに狭い世界の中で、眼前の事物の切実な動きに目を据え、実際の事物の抵抗を感じながら潑刺と生きていた様が、手に取るように明瞭になる。塹壕でオーウェルは、睡眠不足、虱、蚊、鼠に悩まされ続け、狙撃の危険に曝され、絶えず寒気に見舞れ、薪を見つめる事の困難をいやというほど思い知らされるのだが、こうした不快事や困窮や不便や危険は、いずれも具体的な、手応えあるものの一部を成し、それ故、そこに忌わしい空虚などの生じよう筈がなかったのだ。「休養」期間前の、百十五日間に及ぶ前線生活についてオーウェルは書いている、「当時は、この期間は、私の一生のうちで最も不毛な期間のように思われていた」が、「私一個の個人的な見地からすれば——私自身の内面の成長という見地からすれば——前線で過した三、四か月は、その当時考えていた程に不毛なものではなかった。」この期間は「他のどんな方法を以てしても学ぶ事が出来なかったであろうような事を教えてくれたのである。」「本質的に重要な点は、この期間中ずっと、私は隔絶させられていたという事だ。というのも前線で人は外界から殆ど完全に遮断されるのが常だからである」と。⁽¹⁰⁾オーウェルはさらに、この期間は「通常、古い思い出にのみ具わるような魔術的な性質を帯びるに至っている」と書きもするのであって、思い出がオーウェルにとって掛け替えもなく貴重であった事に思いを致すと、この期間を、多くの評者のように、退屈かつ無意味な

期間と決めつける事がいかに的外れであるかも明白になる。

スペインの山岳地帯の前線の、狭く限られた世界の中で、オーウェルが眼前の事物の細部を見詰め続けたという事、そしてそういう細部の描写が際立って生き生きしているという事、これは注目して然るべき点だが、銃後の広い〈安全地帯〉との対比で言えば、細部が意味あるものとなっていた前線の狭い世界は、まさしく正気の世界だったのであり、その正気の世界の直中でオーウェルは塹壕の前の桜の木に生き生きと感応したり、草の緑よりも鮮かな緑色を呈した蛙に驚いたり、新石器時代の段階にあるかのようなこの地方の農業の原始的な農器具に「恐怖に近い感情」⁽¹²⁾を覚えたりする。また村の墓地を見て、「少なくともカタロニアやアラゴン地方のスペイン人にとって、教会は騒音以外の何物でもなかった。恐らくキリスト教の信仰は、ある程度アナキズムに取って代られているのであり、そのアナキズムは広く滲透し、今では疑いもなく宗教的な色合いを帯びるに至っている」⁽¹³⁾と感想をもらしもある。たたなわる山々の上に昇る朝日にしても、それと凡そ対照的な、塹壕周辺の排泄物にしても、しっかりと所を得て輝いている。敵を射つ行為にも異常はまるで感じられないのであり、友情、連帯、信頼がまるで濃密な空気のように兵士の身を包んでいる。この「戦場で人は、何か風変りな価値あるものに接していたのだ」⁽¹⁴⁾。

細部が悉く手応えあるものと化して輝いていた前線の世界に比べて、銃後の世界、即ちバルセロナはどうか。一九三七年四月二十五日、既記の通り、オーウェルは一時休暇を得て前線を離れるのだが、「バルセロナに着いてから面倒な事が始まる」⁽¹⁵⁾のである。百十五日振りを見るバルセロナは以前のバルセロナでは、もはやない。オーウェルの眼前にあるバルセロナは、四か月前のバルセロナとは凡そ異質の、手応え無きものに充たされた世界である。人民戦線の大義の下、「戦争〔＝対フランコ戦争〕に勝利せぬうちは革命を語る事は出来ぬ」という標語

を掲げて、共和政府内で優勢となったコミュニスト達が、戦争と革命の同時遂行を唱えるアナキスト系、トロツキスト系の政党や労組や民兵を圧迫するに至っている。(ここで一言しておく、オーウェルはアナキスト系、トロツキスト系の人々の意見や政策を必ずしも支持していたわけではない。)そして五月三日、コミュニスト系の「勢力」とアナキスト・トロツキスト系の「勢力」との間に、遂に市街戦が勃発するのだが、それはあたりの雰囲気の下に激んでいたおぞましきものを攪拌するていのものであった。「一体何が起きているのか、誰が誰と闘っているのか、誰が勝利を収めつつあるのか、そういった事を見極める事さえ、最初の頃は困難だった」⁽¹⁶⁾「醜悪な噂がとびかっていた」⁽¹⁷⁾とオーウェルは書く。(噂は銃後の雰囲気象徴するものの一つだ。)

市街戦発生の源は、既述の通り、アナキスト・トロツキストとコミュニストとの間に生じた革命と戦争をめくっての意見の対立であるのだが、直接的なきっかけは、アナキスト・トロツキスト系の労働組合員を排除した、表向きは「非政治的な」警察(機動)隊の設置、それと時を同じくして行われた、共和政府側による「銃砲狩り」及びCNT(アナキスト系労働組合)管理下の主要産業の接収である。五月三日、内乱発生以来CNTの労働者によって管理されていた「電話交換局」を共和政府の威を借りた警察隊が接収しようとした事から、市街戦の火蓋は切られ、五月七日事態は、労働組合側に決定的に不利な形で終熄する。オーウェルの見るところでは、労働組合側は、警察の仕掛けた攻撃に抵抗しようとしたに過ぎず、彼等の闘いはあくまでも防衛的なものであった。けれども市街戦の結果、力を削がれた労働組合側、及びこれを支援したアナキスト、トロツキスト系の政治組織や民兵団は、虚偽の報道を基にした国内外の組織的な非難や中傷に曝される事になる。

やがて銃後のバルセロナは「スパイ熱に冒された」⁽¹⁸⁾場所、ジャーナリストをはじめとして嘘をつくのを職業とす

る人々の跋扈する場所と化する。嘘に最もよく代表される手応えの無さがバルセロナの雰囲気のもも際立った特徴となるのであって、一九四二年に書かれた「スペイン内乱を回顧する」(「Looking Back on the Spanish War」)と題するエッセイの中の、「事実とまるで関係の無い——普通の嘘に暗示される程度の関係すら無い——新聞の報道⁽¹⁹⁾」という表現は、この手応えの無さをよく示している。手応えの無さが常態となれば、どのような嘘も罷り通るようになるわけで、ポウムはファシストの組織であるという嘘の宣伝が大がかりに行われ、市街戦はポウムに操られた、フランコの「第五列」の蜂起に端を発するものだという見方が公式に採用されたとしても、不思議ではなくなる。市街戦に関して露骨に党派的であると同時に、露骨に不正確な情報が、外国のコミュニスト系の機関誌を通じて流入し始め、アナーキスト或いはトロツキストと目された者は次々に逮捕され、裁判抜きで刑務所に放り込まれ、ために密告を恐れる雰囲気が自ずと醸成されるのであって、オーウェル自身にしても、「今まで友人であった誰かが自分の事を警察に密告しているのではないか、という厭わしい感情を始終味わう」⁽²⁰⁾始末となり、次のように書くのだ。

その頃(或いはそれより数か月後であってもよいのだが)、バルセロナにいた者は誰であれ、恐怖、猜疑、憎悪、新聞の検閲、すし詰め⁽²¹⁾の刑務所、食料を求める長蛇の列、街を徘徊する武装兵などによって生じさせられた恐るべき雰囲気⁽²¹⁾を忘れないだろう。

オーウェルがスペインで経験したところのものは、たしかに『一九八四年』の全体主義国の雰囲気を描写する際

に活かされているのであり、オーウェルは過去に対して想像力を働かせはしても、未来に対して想像を逞しくした事などないという事、オーウェルの描く未来像には、彼の目や耳を通じて入ってこなかったところのものは殆ど使われていないという事、これは、注意に値する事実である。要するに『一九八四年』の未来像は、嘘の組織化と遍在を身の周りにしかと見届けた者の手になる未来像であるのだ。

「なぜ書くか」(‘Why I Write’, 1946)の中でオーウェルは、堅固な手応えあるものへの愛着を語っているが、スペインの統後の広い世界を率領していたのが手応え無き嘘であったという事は、ジュリアン・シモンズの裏付けるところとなる。シモンズは、スペインへ赴いたイギリスの作家達(オーデン、ステイヴン・スペンダー、アーサー・ケストラー)が、自分で見届けた事ではなくて、「自分が信じた⁽²²⁾と思っていた事を報道した」事、「目的自体が非常に立派なのだから、その目的に役立つ限り、ある程度嘘をついてもそれは全く許容され得ると主張する破目に陥っていた」事⁽²³⁾(スペンダーの場合)、それから、共產主義運動のために益するようにと「意図的に虚偽の報道を行っていた」事⁽²⁴⁾(その頃共産党の秘密黨員だったケストラーの場合)を、当の作家達が後に書いた文章を引用しつつ語り、スペイン内乱に関する大量の架空の情報は一種幻想の世界を作り上げていたと述べている。

オーウェルによれば、嘘の組織化とその遍在の為に外国の新聞や雑誌の演じた役割は大きいのであり、五月の「市街戦」は、外国のマスコミでは、「共和政府の背中に短刀を突き立てる」⁽²⁵⁾ような真似をする不逞の輩、アナキストやトロツキストによって仕組まれたものと言い触らされ、ポウムに至っては、フランコやヒトラーの支援を受けたファシストの秘密組織とまで報じられる。またハンマーと鎌の描かれた仮面がポウムの顔から剥がされて、鉤十字の印された素顔が露になるところを画いた漫画が大量に配布されるが、外国の報道機関に凡そ足場を持た

ぬスペインのアナーキストや親トロツキスト達は、組織的な虚偽の報道・宣伝に有効に対処する術を持たぬまま壊滅に追い込まれるのである。

一九三七年六月十五、十六日、ポウムは弾圧を受け、非合法組織と宣告される。ポウムに繋がりがあった人は、傷病兵であれ、看護婦であれ、ポウム党員の妻であれ、子供であれ、一斉に逮捕され、投獄されるのだが、「ポウムはファシストのスパイだ」という非難は、コミュニスト系の新聞の記事、及びコミュニストに牛耳られた秘密警察の報道のみを証拠としている。⁽²⁶⁾ しかもポウムを非合法化する措置は遡及効を帯びさせられていたのであり、非合法化以前にポウムと係わりのあった事も犯罪を構成する要件と看做されてしまうのだ。

「五月の市街戦は、消し去る事の出来ない後遺症を残した。」⁽²⁷⁾ コミュニスト達が、共和政府内で治安を担当するようになって以来、人々は「漠とした危険の感じ、何かよくない事が今にもふりかかるとはならないか」という意識に絶えず付き纏われるようになる。⁽²⁸⁾ 「陰謀を実際には少しもめぐらしていなくても、あたりの雰囲気には、自分を陰謀家だと思わせる力が潜んでいる。カフェの片隅でひそひそ会話をする時など、隣のテーブルの男は警察のスパイではないかと疑う。なんだか始終そんな風に時を過しているような気がした。」⁽²⁹⁾ 手応えあるもの、堅固なものが皆無といった状態、確かな情報の代りに様々な嘘が飛び交う状態。検閲された新聞。裁判にかけられる事もなく、いきなり投獄され、外部との連絡を断たれる「アナーキスト」や「トロツキスト」——こうした一切が、「悪夢のような雰囲気⁽³⁰⁾」をつくりださないとしたら奇蹟である。何か巨きな、悪しき諜報機関が街全体に睨みを利かせているという感じで、オーウェルの知人や友人は、異口同音に、「この街の雰囲気は恐ろしい。まるで精神病院にでも入っているかのようだ⁽³¹⁾」と言う。全体主義の雰囲気⁽³⁰⁾が殆ど完璧なものとなってしまっているのだ。その頃スペインで実施

されていた検閲に関してオーウェルは「検閲を受けた箇所は空白のままであってはならず、他の記事で埋めなければならぬ、という新しい規則が作られた。その結果、検閲が行われたかどうかさえ、見分けるのがしばしば困難となった⁽³²⁾」と述べているが、ロバート・A・リーが指摘するように⁽³³⁾、これは『一九八四年』の主題との類似を見事に示している。

さて、オーウェルはバルセロナの市街戦が終って三日後に再び前線へ行くのだが、もうその頃になると、スペイン内乱を「ナイーブな、理想主義的な眼で見るのは困難となっていた⁽³⁴⁾」、と告白せざるを得ない。フランコがうちまかされたとしても、事態が明るくなるとは決して言えない、とオーウェルは思う。「民主主義擁護のための戦い」という新聞の主張に至っては、これはもう全くのペテンである⁽³⁵⁾。真つ当な感覚の持主は、戦争が終わったらスペインに民主主義が根付くなどと希望をかけるはしない。「都市のプロレタリアートにとっては、どちらの側が勝とうと最終的には殆ど違いはないだろう⁽³⁶⁾。」そして、フランコはイタリアやドイツの単なる傀儡というよりはむしろ、「封建的大地主と結び付き、軍人・聖職者の反動を代表していた。人民戦線はいんちぎであるかも知れぬ、しかしフランコは一個の時代錯誤である⁽³⁷⁾」と書く時、オーウェルの胸の片隅にフランコを正当に評価したい気持が萌していた、と言えなくもない。この点で興味深く思われるのは、イギリスのすぐれた歴史家A・J・P・テイラーがオーウェルとほぼ同様の見解を示している事だ。

反乱は、一般には、ファシスト達によって入念に仕組まれた、民主主義反対の為の陰謀の一環と受け止められていた。その際フランコはムソリーニの、或いはヒトラーの傀儡という事になっていた。こういう見方には、実

際のところ、根拠はなかった。フランクは誰の傀儡でもなかった。彼はローマ或いはベルリンの峻しなど受けずに行動したのである。そして後には、スペインの独自性を頑強に主張して注目を集めるに至ったのである。またスペインで両陣営が掲げていた大義に関して言えば、ほんとうのところは、事はフアシズム対民主主義という単純な図式では捉えられなかった。まして社会主義対資本主義という図式ではなおさら捉えられなかった。しかしながら、当時、人々がどのように信じたかが、実際に何が起きていたかよりも重要だったのだ。⁽³⁸⁾

テイラーの最後の一句は、スペイン戦争をめぐる嘘がどれ程大きな力をふるったかを間接的に物語っている。

三 「銃後」の遍在

既記の通り、二度目に前線に到着してから十日ほど経ったある明け方、「フアシスト」の弾丸がオーウェルに命中する。担架で運ばれる途中、塹壕の縁に生えているポプラの葉に顔をなぶられ、「銀色のポプラの生えている世界に生きるとは、なんとすばらしい事か⁽³⁹⁾」と思う。オーウェルのこの〈細部〉への共感、我々の心を動さすにはおかない。ここには、前線の狭い世界に正常なものを感じ取るオーウェルの感覚が躍如としている、と言ってもよい。レリダなる町の病院で、五、六日入院生活を送る際にも、病院の庭の中の池、その池の中の金魚や鯉を飽かず眺めて幾時間も過すのであって、身辺の狭い世界はオーウェルにとって余程大事な意味を持っていたに相違ないのである。彼は僅かな土地をしっかりと踏んでいるのであり、その僅かな土地から脱け出ようなどという気を別段起

しはしない。

傷はかなり癒えはしたものの、銃後の広い世界では、「大がかりな魔女狩り」⁽⁴⁰⁾が進行中なので、やがてスペインからの離脱を真剣に考えなければならなくなる。その離脱に必要な除隊承認の印を得るべく、オーウェルはいま一度前線の部隊まで足を運ぶ事になるのだが、前線はオーウェルの眼にはいよいよ正常と映るばかりだ。

前線に近づくと雰囲気が一変するように思われて、奇妙だった。党派間の悪辣な憎悪は悉く、或いは殆ど消え失せたのだ。前線に留まっていた間中、P・S・U・C〔コミュニスト系の政党〕の党員が、ポウムの一員であるという理由で私に敵意を示すなどという事は一度も無かった事を憶えている。⁽⁴¹⁾

敵を射つという行為があったからといって、それで前線の世界の価値が減るわけではない。「敵を射つ時、人は最も深い意味においては、敵に不正を行ってはいはしない」⁽⁴²⁾とオーウェルは書きもしたのであって、堅固な、手応えあるものに囲まれ、眼前の事物の切実な動きに目を据えて生きる事が出来た限り、オーウェルは充足を、そして自由を感得出来たのだ。

前線の価値が際立つのは、嘘と憎悪に充ちた、手応え無き銃後の世界との対比においてであったという事、その銃後の世界はスペインに限られてはいなかったという事、これはその後のオーウェルの発展にとって頗る重要な意味を持つ。スペインの銃後の世界の雰囲気はイギリスの言論界にも染み透っているとオーウェルはイギリスに帰国するや否や発見するのであり、実際彼を待ち受けていたのは、「スペインに関して真実を語るとファシストの宣伝

に利用されるなどという理由を挙げて、すすんで虚偽に身を任せて」恥じる事を知らない知識人達の姿であった。例えば、スペインについてのオーウェルの文章を載せると一旦は承諾した「ニュー・ステーツマン」紙は、内容がポウムの弾圧に触れているのを見て、掲載の拒否を通告してくる始末である。代りにと言って頼まれたスペインに關する本の書評（この本はオーウェルには真実を語っているように思われたのだが）を書き上げて渡すと、「編集方針に反する」などという理由でまたしても掲載を拒否される。従来オーウェルの本の出版を引き受けていたゴンツも、オーウェルがポウムと無関係ではなかったという事、バルセロナの市街戦の真相をぶちまけそうだという事をいちちやく察知して、オーウェルがまだ一行も書かないうちから、オーウェルの本（後に『カタロニア讚歌』となる本）の出版を断ってくる。一方、スペインに關して多量の嘘を含んだ文章は発表の機会に大いに恵まれるという具合で、オーウェルは「イギリスの新聞で真実を発表するのは頗る困難であるという事」⁽⁴⁴⁾を痛切に思い知られる。親共産党派の検閲が疑問の余地なく存すると彼は考えもするのであって、検閲の影響するところは、ソ連に不利に作用する一切の活動の抑制となって現れる。例えば、スペイン共和政府の牢獄に閉じ込められている反ファシスト達の釈放を訴える嘆願書が回されても、イギリスの指導的社會主義者の中でこれに署名する者は、殆どいない、といった有様だ。

このように知的誠実を阻む雰囲氣の醸成は、ソ連神話にその源があると考えたオーウェルは、この頃から齒に衣を着せぬソ連批判を行うのであり、そのソ連批判は、いわゆるミニコミに發表された書評の形で現れる、UP通信の特派員として一九二八年から三四年までソ連に滞在したユージン・ライオンズの『ユートピアへの特派』の書評（一九三八年）はその一つである。

ライオンズ氏の描く体制は、ファシズムとあまり異ならないように見える。真の権力は、二、三百万人の人々の手に握られ、理論的には革命の後継者の善の都市プロレタリアートは、基本的なストライキ権さえ奪われている。最近になって導入された国内用バスポート制度のおかげで、彼等は農奴にも似た地位に突き落されてしまっている。ゲー・ペ・ウーは至るところにおり、人々は絶えず密告の恐怖に戦きつつ暮らしている。言論の自由は想像するも不可能なくらい、徹底的に踏み躪られている。肅清の嵐は定期的に吹きまくり、何か月も、いや何年も刑務所におち込まれていた人々が突然引き摺り出されて裁判にかけられ、信じ難い告白を行い、その子供達を父親を、トロツキストとして告発する文章を新聞に発表したりする。一方見えざるスターリンは、ネロ皇帝をも赤面させるようなやり方で崇拜されている。⁽⁴⁵⁾

オーウェルはスペインでの体験に照らして、この書物がソ連について真実を伝えているとただちに見抜き、深い共感を以て読み了えたのだ。この本からオーウェルが掴み得たソ連像は『一九八四年』のオウシアニア国の社会描写に大いに役立ったに相違ないのであり、例えば、「見えざるスターリン」は見えざるビッグ・ブラザーに、都市プロレタリアートはブルルに、信じ難い告白を行う人々は、ジョーンズ、エアロンソン、ラザファードに重なるのを『一九八四年』の読者はただちに理解する。

スペインの統後の「広い世界」が、ソ連を源にしていたのはかくて、明白となるのだが、「ソ連神話」の支配するこの「広い世界」においては進歩の不可避が説かれている、ところでひとたび進歩は不可避と仮定すると、どのような圧制、虐殺も大目に見る態度が否応なしに生じさせられ、この世の地獄が招来されるというのはオーウェル

には明白すぎるくらい明白な事だった。この進歩不可避説には一個の恐るべき不条理が潜んでいるが、この不条理は、「普通の人間の真つ当な感覚」の到底容認出来ぬ理論、「漸進主義の衣を着た破局の理論」(Theory of Catastrophic Gradualism) (と後にオーウエルは名づけるに至った) の生み落すものである。この理論によれば「卵を割らなければオムレツは作れない」のであり、「それはそうだ、しかしオムレツはどこにあるの」と訊く者に対しては、この理論の信奉者は次のような答えを常に用意している。「ああ、あのね、何事も一瞬にして成就されると期待してはいけないんだよ。」⁽⁴⁶⁾ ユートピアを実現するには肅清、虚偽、圧制、強制移住、秘密警察は不可欠であるが、そのような恐るべき代償を払っても、ただちによき結果が齎らされると期待してはならぬ、とこの理論に拠る人々は説くわけだ。ここに顔を出している不条理は、スペインの「銃後」の世界の「手応えの無さ」が見事に結晶したもので、と言ってもよさそうである。

四 過去への旅

ルポルターージュ『カタロニア讃歌』の後に書かれた長編小説『空気を求めて』のはじめの方に、街を往く主人公が、眼前の群集や鼻をつくガソリンの匂いや耳に入るエンジンの音よりも遙かに実在性あるものとして、三十八年前、即ち一九〇〇年のある口曜の朝の、生れ故郷ローアー・ピンフィールドの竹まいを思い出す、いや単に思い出すだけではない、自分は生れ故郷の世界にまると溶け込んでいるのだという感じに襲われる箇所があるが、過去へのこういう対し方が、この小説のいわば基調低音をなす、と言ってよい。

よきもの、全きものは、思い出となって甦る過去にしか存しないと思っている主人公の態度は、スペインの銃後で経験した「現代」——過去が廃絶させられ、未来が矢鱈に幅を利かせるに至った「現代」——への嫌悪や反撥と切り離しては考えられないのであって、その「現代」は、同じく小説のはじめの方で、軽食を取ろうと立ち寄ったミルクバーで主人公が一口食べたフランクフルト・ソーセージの感触で的確に表現される。皮も中味も魚製の「腐った梨のように」ぐしゃとした感じを与えるソーセージを一口、口中に含んだ時、「現代世界そのものをがぶりと噛んだような気がしたのだ。現代世界がどういうものから成り立っているかを発見したのだ」と主人公は言うが、この場合「現代世界」は、肉の代用品たる魚に象徴されているわけで、してみると「現代世界」は偽物、或いは真っ当でないものを掴ませるのを特徴とする世界という事になる。そして、小説はやがて真っ当でないものの最たるものは未来に対してひたすら想像力を働かせようとする態度と教えるに至るのであり、事実、主人公の周りの世界は、未来に対して想像力を働かせようと躍起になる手合に事欠かない。

一九三〇年代のイギリスの知的風土を特徴づけていたものの一つたるレフト・ブック・クラブ、即ち毎月橙色の表紙の本を一冊会員に廉価で販売し、会員を対象に講演会を開く事もしていたレフト・ブック・クラブ、そのクラブの講演会が主人公の住む郊外の街でも催される事になり、レフト・ブック・クラブの会員でもある主人公は「有名な反ファシスト」が「ファシズムの脅威」と題して行う講演を聴きに行く事になるのだが、「有名な反ファシスト」の講演を聴いているうちに、主人公は、奇妙な発見をする。即ち講師は要するに「憎め、憎め、さあみんな一緒に思い切り憎みましょ(46)う」と叫んでいるに過ぎないと発見する。主人公にとって、スローガンの羅列のようなこの講演は、「こちらの頭の中に何かハンマーのようなものが入り込んで、脳髓をがんがんに叩きまくっているといっ

た感じ⁽⁴⁹⁾」のものとなる。なるほど「有名な反ファシスト」は、未来に対して想像力を働かせてこれを生きているのだが、それは「大蛇の口の中にとび込む兎さながらに」未来にとび込んだ事を意味する。そしてその未来においては、敵に殺られないうちに敵をやっつける、が合言葉となるのであって、真一文字に未来にとび込んだ「有名な反ファシスト」はファシズムへの憎しみを執拗に語るそのそばから、権力欲に取り憑かれた自身の姿をさらけださずにはおかないのだ。過去との繋がりや断ち、未来を信仰する事は、恐怖と不安に陥る事に直結しているという事、その恐怖と不安は、未来信仰者を駆って権力の掌握に赴かせるという事、そういう仕組みが「有名な反ファシスト」にいわば透けて見えるのだ。この手の人間が威勢をふるうところには、戦争それ自体よりも恐るべき世界、即ち憎悪とスローガンに充たされた世界が現出するのであり、既に「有名な反ファシスト」の声自体が「憎悪とスローガンに充たされた世界、有刺鉄線、ゴム製の棍棒、昼夜煌々と明りのついた秘密の独房、睡眠中の人をも監視する秘密警察、デモ行進、巨大な顔を描いたポスター、指導者に耳を聳せんばかりの拍手を送り、遂にはその指導者を崇拜していると信じ込むと同時に、他方胸底では始終⁽⁵⁰⁾反吐を吐く程に、その指導者を憎む百万人も群集⁽⁵¹⁾」の出現の不可避を暗示している、と主人公は思う。一種の未来信仰、それと一体不可分の権力欲に燃えた「有名な反ファシスト」はスローガンを思考の代りとする程に、内面の空疎に見舞われているといった風で、ここで注意を要するのは、この手の人間にとって「私的世界」(「狭い世界」)は凡そ無意味極まるものと化しているという事だ。「私的世界」を喪失し、代りに「公的世界」(「広い世界」)を得た「有名な反ファシスト」について、主人公は思いめぐらざるを得ない。「この男はどうやらヒトラー反対の本を書く事で生計を立てている。けれども、ヒトラーが登場する以前は、彼は何をしていたか。ヒトラーが消え去った後は何をするつもりであるか。」⁽⁵²⁾このような疑問が浮

ぶ事自体、この男の内面の空ろを暗示している筈で、主人公がさらに次のように呟く時、この男の内面の空ろは、否定のしようのないものとなる。「もしもこの男の体を切り裂いて覗いてみたとしたら、みつかるのは民主主義—ファシズム—民主主義だけだろう……多分この男の夢でさえもスローガンに充たされている事だろう。」⁽⁵³⁾

スローガンや憎悪を思考の代りにして自足する事の空ろとおぞましき加減がこのように別抉される時、確かに、作者オーウェルが顔を出しているのだが、それはオーウェルが空ろと対極のところ、即ち彼が現に物を書いているところ、現に彼が息づいている、静謐に傾された狭いところ（「狭い世界」）を読者に垣間見させるといふ意味合いのものでもあるのだ。オーウェルは、一九三八年『カタロニア讃歌』が出版された頃、ケント州のサナトリウムで肺結核の診断を下され、九月には医師の勧めで暖かい土地、即ちモロッコのマラケシュに転地療養という事になり、そこで六か月を過すのだが、その半年のモロッコ滞在中に浸り得た静謐、その静謐の持続するところ、そこがオーウェルの現に物を書いている小さな世界なのだ。「これまで一度も扱った事がなく、現在でもこれを適切に仕上げようとすれば時間が足りない、そういう大きな主題が突然頭に閃いた」とオーウェルは一九三八年十二月、モロッコから友人宛に書く。「頗る漠とながら、数巻にまたがる大小説の着想も得たのだが、これを仕上げるには数年間もの静謐が必要なのだ。」⁽⁵⁵⁾翌年一月には、別の友人宛に「三部から成る、『戦争と平和』程の分量の大小説の構想をあたためているが、第一部を大雑把に仕上げるのにもあと一年は要する」などと書く。大小説を書き上げる程の静謐は勿論得られはしなかったのだが、『空気を求めて』を書き上げる程の静謐は得られたのである。そして彼が物を書く時に築かれる内的世界のお蔭で、これとは凡そ異質の世界、「有名な反ファシスト」が体現しているような世界の描写も可能になったのだ（注意すべきは、「勿論、ぼくの言う静謐は戦争の無い状態の謂ではない、な

せて、実際、戦闘のさなかにおいても人は静謐を保てるのだから」とオーウェルが言っている点だ。⁽⁵⁷⁾

さて、主人公の思い出とは、未来信仰などつゆ知らず、伝統を生基盤にして何一つ不足を感じなかった母や父の生きていた狭い世界にまつわるものである。広い世界、即ち国際的なひろがりを持ちさえする世界に棲む現代人とは異なつて、父や母は私的世界を確保し得ていた、それは紛れもない事実だ、と主人公は思うのであり、「母が練り粉を麵棒で伸すところを見るのが好きだった」と述懐する主人公の眼には、「神聖な儀式を執り行う巫女のような、一種格別で厳肅な、自己沈潜したような、自己充足したような母の様子」⁽⁵⁸⁾がありありと浮んでくる。「料理をしている時の母は、本当に自分の理解するものに取り囲まれ、本当に自分のものと呼べる世界に棲んでいたのだ。母にとって外界は実のところ、日曜発行の新聞や時折交わす噂話を通じて垣間見られるていのものでしかなかった。⁽⁶⁰⁾」⁽⁶¹⁾そういう母は「信じ難いほど無学だった」⁽⁶²⁾のであり、アイルランドがイギリスのどちら側に位置しているかも、第一次世界大戦が勃発した折、誰がイギリスの首相を務めていたかも知らなかつた程だが、母はその種の事を知ろうなどという気持を毛頭有っていなかった。「実際のところ母は、ごく普通のインド婦人の部屋と同じくらい狭くて、殆ど同じくらい私的と看做されて然るべき空間に棲んでいた。」⁽⁶²⁾それでなぜいけないか、そこに不健全なものがあるか、と主人公は問うている。「狭めた事は深めた事ではなかつたか」と小林秀雄はモーツァルトに触れて書いた事があるが、母は、ローアー・ビンフィールドの外の世界は、殺人の行われる場所と看做して一向不便を感じず、五時と六時の間に、濃いお茶を飲みながら殺人事件の記事（勿論殺人の仕方が現代のように墮落していない頃の殺人事件の記事、しかも時には何度も登場させられる殺人事件の記事）を読むのを無上の楽しみとしていた、そういう母は、イギリスの風習や伝統の中に息づいていたのであり、その限りで、逆説的だが、広い、豊かな世界

に棲んでいた、と主人公には感じられる。(この感じ方は、あの頃は「世界が誰にとっても十分に広がった」という言い回しに示される)。一方、母の棲む世界は、決して衛生的ではなかった、無論ローアー・ビンフィールドの殆どどの家も衛生的ではなかったものであり、夏には人々はきまってる青蝇との共存を強いられた。が、主人公は「諸君は青蝇の音と爆撃機の音とどちらを聞きたいと欲するか」と問うのであって、この間にこの小説の主題が要約されていると言える。青蝇の飛び回る程に非衛生的ではあったにしても、私的世界の確保されていた過去と、未来を信ずるなどと言いながら、その実不安と恐怖に囚えられた空ろな人々、その空ろな人々の象徴たる爆撃機の飛び回る現代と、そのどちらに諸君は属したいと欲するか——無論主人公は(そして作者オーウェルも)過去に属するのをよしとしているのであって、それは偏に、過ぎ去った時代の人々、第一次世界大戦前の人々は「未来を何か恐るべきものとは看做していなかった」⁽⁶⁵⁾からである。実を言えば主人公は、過去と繋がるより他に術はないという地点にまで追いつめられているのであるが、それに触れる前に、主人公の思い出に生きている(そして思い出に生きるより他はない)過去を取り上げてみよう。

「戦前」に対して憧れを抱かざるを得ない主人公は、「今の人からは喪われてしまっている何かを、あの頃、人々が持っていたのは確かだ」⁽⁶⁶⁾と言う。今の人から喪われてしまったもの、それは安定感であり、持続感であるのだが、しかし主人公に言わせると、それは戦前の人々の生活が安楽だった事を意味しはしない。生活は今よりも厳しかったのであり、人々は今よりも一所懸命働かねばならなかったし、また人々は今よりも苦しい死に方をしてきた。破産、病死、酒浸りの夫、ててなし子を産んで一生を台無しにする娘、風呂の無い家、冬の朝洗面器に張った水を割って洗面をする人々。そうしたものが否定すべくも存していたにもかかわらず、戦前の方が時代としてはま

しだった。なぜか。「人々は、実際には生活が安定していない場合でも、安定感を抱いていた、もっと正確に言えば、人々には持続感が具わっていた」⁽⁶⁷⁾からである。死ぬる事も、破産する事をも承知してはしても、人々は物事の秩序は、我が身に何事が起ろうとも、昔に変わらぬ姿のまま持続する、と信ずる事が出来たからである。「大切にしているものが滅びないのであれば」善も悪も昔に変わらずに残るといっているのであれば、即ち道徳が変わらないのであれば、「死ぬるのは苦にならない」⁽⁶⁸⁾。主人公によれば、戦前は大切にしているものが滅びない時代、善も悪も昔に変わらず残り得た時代であった。それ故、文明が強固な基盤の上に築えていた時代、「拠って立っている大地が揺らぐのを感じなかった」⁽⁶⁹⁾時代であった。そういう時代に、未来は問題とはなり得ない、人々は未来を思い煩ったりはしない。既述の通り、過去を愛惜する気持は、『空気を求めて』を貫いて流れているところのものが、過去は、漠然たる過去ではない。些事が所を得る事によって蘇る過去なのだ。例えば主人公の生れ故郷ローアー・ビンフィールドの「市場の中央に置かれた石造りの飼い葉おけの水面に、いつも薄い漠のように浮んでいる埃や糞⁽⁷⁰⁾」の場合のように、細部において上手に思い出される事によって、目の前の現実よりも遙かに現実味あるものとなった過去である。

過去とは奇妙なものである。いつも人と共に在り、実際、人は十年前、或いは二十年前の出来事を思い出さずには一日たりとも過す事はないのだが、大抵の場合、人は、過去にリアリティを付与する事をせず、過去を、歴史の教科書で接する夥しい暗記事項と同種の、単に頭脳から入って来る一連の事実⁽⁷¹⁾に過ぎぬもの、と看做してしまふ。が、そういうするうちに、ふと目にした光景、或いはふと耳にした音、ふと嗅いだ匂い、特に匂いが、人

の想像力を刺戟する。かくして、過去は単に戻って来るだけではない。人は現実に過去に生きる事になるのだ。⁽⁷¹⁾

主人公はたまたま、新聞の見出しに使われた「キング・ゾグ」なる固有名詞を目にして、突如三十八年前のローアー・ビンフィールドの思い出に深く入り始めるのだが、その場合、過去を美化しようなどという気持に突き動かされているわけではないと断っている。「少年時代を美化したりなどはしない。他の多くの人と異なって青春に戻りたいとも思わない。」⁽⁷²⁾けれども主人公は、「自分の少年時代に対しては言わば感傷的になっている」と告白している。「俺一個の少年時代の故にはない。俺を育ててくれた文明、今は氣息奄々としている文明の故である」⁽⁷³⁾。少年時代の細部を辿る事自体が、現代世界の批判を孕む次第となるのだが、主人公にとって最も強烈な思い出は釣にまつわるものである。「釣はどういうわけか、この文明を典型的に表しているのだ。釣の事を思い浮べると、現代世界に欠けているものが何であるかが分る。」⁽⁷⁴⁾静かな池の縁の柳の木の下に、日ねもす坐して過す事自体、戦前——ラジオも飛行機もヒトラーも存在しなかった戦前——に固有のものである、と思う。さまざまな魚の名称自体、堅固な存在感を醸し出すではないか。「魚に名前をつけた人々は、機関銃の事など聞いた事がなかったのだ。解雇を恐れつつ生きたりなぞしなかったし、アスピリンを飲んで時を過す事もしなかったし、映画館に籠って、強制収容所にぶち込まれずに済む方法について、あれこれ思案をめぐらす事もなかった」⁽⁷⁵⁾。

主人公は、どういう魚にはどういう餌がよいか、餌はどういうところで入手するか、どういう魚にはどういう釣竿が適しているか、などについて、事細かに職人風に語り、一種驚くべき博識を開陳するのだが（序に言えば、こういう知識、「夏炉冬扇の如き情報」は、堅固な手応えあるものと同様、オ・ウェルの愛してやまなかったもので

ある)、この釣の思い出の中で、特に読者の注意を惹くのは、釣をするうちに、孤独や静寂を愛するようになったと語られる箇所、この孤独と静寂を愛する主人公、樞の樹々に遮蔽された秘密の池の静寂と孤独に浸る事の喜びを覚えるに至った主人公と、畑中の焚火の残り火に感動する四十五歳の主人公との間に、しかと存する連続性の意味合いを見逃すわけにはいかない。「時折ひとりきりになるのはいい事だと悟る年齢に達していた」少年は、中年の男、即ち不動産鑑定の仕事に出掛ける途中、桜草の一面に生い茂った田舎道で車を停めて、冬麦畑の柵の近くの焚火の残り火を見て、「奇妙な事だが、生は生きるに値するものだ、桜草や生垣の新芽以上に力強く、突然俺に確信させたものは、柵の門の近くの残り火であつた」と語る保険会社員にまさしく重なるのだが、両者の違いは、四十五歳の主人公は世界を狭く限る事の意義——内的経験の意義——を悟っているという事、そしてそういうふう
 に世界を限定する事と思ひ出すという行為との間に親和力の働くのを知っているという事、この一点に存する。冬麦畑の柵の近くの一隅は、四十五歳の主人公が思い出に浸る時に扱って立つ場、ニーチェの言う「黄金の柵に囲まれた園」となっているのだ。そして畑中の小さな世界を眼前にして、主人公が「青春に戻りたいとは思わない。ただ生き生きと生きていたのだ。そして俺は、桜草と柵の下の赤い残り火を見詰めていたあの時、生きていたのだ。それは、内部に宿る感情、一種の静謐に領された、それでいて炎に似たところのある感情のせいだ」と言い切る時、主人公は、世界が狭く限られるところに生の意義、「生の悲劇的意義」を見出す古典主義者を彷彿させると言ってもよい。

愚劣な事に時間を費やしたりなどしないで、ただ歩き回って物を見詰める——例えば水溜り、その水溜りの中の草や小動物の佇まいを見詰める、なぜ人は、そういう事をしないか。内部に「一種の驚異の念、特殊な炎」を宿ら

せてくれるそうした行為こそ価値ある唯一の行為であるのに、現代人はそういう行為には目もくれない。「そういうものを見詰める事で、一生を、いや一生の十倍もの期間を過す事だ出て出来る。それでも、その水溜りを見極めた事になりはしないのだ。」狭く限られた〈場〉に在っては、過去を思い出す、上手に思い出すという行為は、呼吸のように自然なものとなるが、一方「戦争そのものが怖いのではない、怖いのは戦後の世界だけだ」という感じ方も主人公の身にはしかと具わっているのです、そういう主人公は、「有名な反ファシスト」が喚び起すていの世界、想像力を未来に対してのみ働かせようとする進歩的知識人の作り上げる世界から目を逸らしはしない。進歩的知識人の作り上げる世界、それは言ってみれば先取りされた未来、「想像力を頼りに」肉付けされてしまった未来である。周囲を注意して眺める主人公の眼に映るのは、常に「正しい」事がスローガンとなって叫ばれていながら、いや叫ばれているが故に、内部に宿る特殊な感情、静謐、一片の孤独をも許さない政治万能の世界、「食料を求める人々の列、秘密警察、思想を統制する拡声機」を生み出すに至る世界、「スローガンの絶叫を思考の代りとなし、弾丸を言葉の代りとなす、やけに合理的な人間」の活躍する世界、スペインの統後の世界の延長物の観を呈する世界である。

このように見て来ると、オーウェルは未来に対して想像を逞しくする必要などなかったという事がこの上なく分明になろう。未来に対して想像力を働かせ、かくして得られた「未来」を現実生きていたのは、彼の周囲に蠢くりペラルな知識人だったのであり、そういう知識人を見詰めさえすれば、例えば『一九八四年』の未来像は殆ど自動的に得られたのだ。オーウェルにとって想像力を働かせるべき対象は過去であったという事は、改めて注意していい事なのである。

五 「広い」世界

『空気を求めて』の主人公は、少年の頃故郷で人々の味わうところとなっていた静謐、安定感、持続感が、ひょっとしたら当の故郷に現在でもみつかるかも知れぬと思いつき、二十年振りに故郷ローアー・ビンフィールドを訪ねる事にするのだが（ここで序に述べておくと、この故郷再訪は、この小説の主要なアクションを構成している）、しかしこの再訪はとどのつまり主人公に、過去は思い出しにしか存しないと思いつける結果になる。ロバート・A・リーは『『空気を求めて』』は、オーウェルの作品のなかで、主人公の直面する問題の解決が、本質的に内面に求められた最初の作品である⁽⁸⁵⁾と言っているが、その通りであり、内面に解決を求めるといふ法は、『一九八四年』の主人公の探るところともなっている。もっとも『一九八四年』の主人公の場合は惨めな失敗を運命づけられているのだが。

「ローアー・ビンフィールドはどこへ行ってしまったのか⁽⁸⁶⁾。」二十年振りに町を遠望する丘の上に立った時に主人公の発するこの一言が、再訪の意味を適切に要約している。かつては四分の一マイルほどの本通りを中心に、十字型に小ぢんまりと、しかし広々とした過去を蔵して存在していた町、主要な目印としては教会の尖塔と醸造所の煙突しかなかったその町は、今では頭上に爆撃機の飛び交う、軍需工場のある町と化している。町はたしかに拡大し、郊外を現出させてもいるが、それは「テープルクロスに肉汁をぶちまけたように拡がったに過ぎず⁽⁸⁷⁾」その野方図な拡大、それに随伴する新しさの謳歌は、「過去という事実を根こぎにする⁽⁸⁸⁾」仕事に成功した事を如実に物語っ

ている。

昔のローアー・ビンフィールドは「ペルーの失われた都市のように」消え失せてしまっている、とも語られるが、野放図な拡大の象徴たる郊外という現象の普遍化するなかでは、菜食主義者、自然崇拜者、妖精愛好家、素朴な生活信者を以て任ずる手合が、森林を伐採し、家を建てまくり、池の水を抜いて池をこみ捨て場にするのも不思議な事ではなくなっている。そして防毒マスクをつけた児童の防空演習に象徴されるように、人々は安定感や静謐や持続感と凡そ対蹠的な生活感情の中に生きていたのであり、その事を裏書きしてみせるかのように、主人公の故郷滞在最後の日に、頭上に現れた爆撃機の編隊から爆弾が一個誤って投下され、民家が二戸破壊され、死者が三人出るといふ事故が発生する。主人公や町の人々が条件反射的にドイツとの戦争勃発と信じるところに、この町を支配している不安感が出されていると言い得るのだが、それは兎も角、この誤爆は、長年主人公が心の片隅に、一種の避難所のように大事にしまっておいたローアー・ビンフィールドが、現実の世界には存しないといふ事を決定的に悟らせるに至る、即ち過去は、過去の日々が過ぎた現実の場所ではなく、思い出しにしか存しないといふ事、過去への旅は内面においてしか行われ得ないといふ事を悟らせるに至る。

という事は、扱るべきものとして思い出しに残されていないといふ事だが、一九三〇年代の社会の中で、思い出だけを扱りにするというのは、追いつめられ、孤立させられている主人公の姿を浮き彫りにせずにはおかない。そして主人公にとっては家庭も扱りにし得ないのだ、というのも家庭に君臨しているのは、何かにつけて深刻がり、パニック状態に陥るのを事とする妻、そして恐ろしく粗暴な二人の子供だからである。『一九八四年』の世界との類似はこうしたところにも顔を出しているのだが、それはさておき、主人公の妻は、消費生活の次元にお

いてではあれ、未来を思い煩うのを生きがいとする人間の一人、災厄を予見した時などに生き生きとしてくる人間の一人である。法外な安定感を求めるが故に、災厄を予想せずにはいられないと言ってもよいのであり、かくて物価や日常の諸々の支払い——月賦で買ったラジオの支払い、タバコの値上り、ガソリン代、子供の靴の代金、教育費——に関して限りなく心労するのが義務となり、妻はその義務感から惨めな雰囲気を否応なしにつくり上げてしまう。「妻に本当にショックを与えるのは俺の心配をするのを拒否するその事である。」⁽⁸⁹⁾ 金銭に関してはプロレタリアートの態度を持っている主人公にしてみれば、「生は享受されるべくあるのであって、次の遇零落する破目にならうとも、なに、その次の週は遠い先の事だ」と考えるのは自然なのであり、未来を思い煩わないそういう態度が保持されるところに、過去への旅もその意義を現すはずだが、ローアー・ビンフィールドから帰宅する主人公を待ち受けているのは、過去への旅の意義が意識のほんの片隅にのぼる事さえも許すまいとする家庭の雰囲気である。

主人公は確かに追いつめられ、思い出に拠るより他に生きる術を持たないと言ってよいのだが、しかし拠るべきものとして思い出がまだ残されていると解る事も出来るわけで、『一九八四年』の主人公は、思い出に浸る事さえ拒まれるに至る)、そう解れば、思い出の残存を僥倖と受け取る道も自ら拓けてくる。そしてその時、思い出は、一種侵し難い「世界観」と化しさえする、小林秀雄流に言うところ、狭められた事が幸いして、深める事が可能になるという事がたしかに起るのであって、オーウェルはハーバート・リードの著書に触れて、己れに固有の世界観はそういうふうに深めたところからしか生じようがない、という意味の事を語っている。「たとえ時代遅れと看做されようとも」己れの生きた時代の思い出をかけがえのないものとして受け取り、「己れの世界観に固執すべきである。

というのも、それは己れよりも若い世代の決して持つ事のなかった経験に発する世界観だからである。それを棄て去るのは、己れの知性の根を殺す事に他ならない。⁽⁹¹⁾

『空気を求めて』の主人公兼語り手は、義歯を入れたばかりの四十五歳の、グラマー・スクール出の「太っちょ」である。「過去の遺物」を以て自ら任じている保険会社勤めのこの男に、作者は、「太った人間の内部には必ず壊れた人間がいる」と語らせているが、それは、主人公の周囲の人間が主人公に気軽に、幾分軽蔑をこめて接するのと同様に、読者も主人公に気軽に接するだろうという作者の期待、それから警戒心を解かれ、いわば身構えをせず主人公に接する読者の虚を衝いて、主人公に深みのある思想を語らせようという計算を表すものである。作者のこのような期待と計算の結果は、『カタロニア讃歌』よりも根柢的な現代批判を含んだ作品の誕生となったのである。

六 結び

限定されてある事に充足を覚え、これを生の条件の一つにしようとするオーウェルの態度は、『牧師の娘』で、例えば主人公ドロシーがホップ摘みの労働に従事する時に表出されもしたが、『空気を求めて』においては、例えば主人公が世界を「水溜り」に局限する時に示され、『一九八四年』では、主人公ウィンストン・スミスと恋人のジュリアがはじめて人里離れた林の中で密会に成功する時とか、骨董品屋の二階で愛し合う時とか、その骨董品屋で求めた珊瑚の嵌め込まれたガラスの文鎮に世界を限る時とかに示されたのである。そして、『カタロニア讃歌』においては、作者オーウェル自身によって、世界が前線の塹壕を核とした文字通り狭い場所に、限られた時に、鮮明

に表出された。

三沢佳子氏は、オーウェルが海を描かない事、『牧師の娘』の舞台となつてゐるサウスウオルトが海辺の町であるにも拘らず、その作品でオーウェルが海に全く言及していないのを奇異に感じておられるが、⁽⁹⁸⁾限定に適しない海はオーウェルの関心を惹くに足りなかつたという事だったのかも知れない。『カタロニア讃歌』の銃後の世界たるバルセロナも地中海に臨む街なのだが、オーウェルは映画館の屋上から海を望見しはしても、別して感慨を催したりなどしない。

限定に適せぬ茫漠としたものに無関心になる事、違和感を覚える事、ここにオーウェルのペシニズムがはつきり嗅ぎ取られるのであつて、オーウェルは、限定されてある世界に居心地のよさ、いや自由を感じる点で結局、「己れを限定し他から隔離するのは最も偉大な技術である」と言つたゲータと同様に、一個の古典主義者であつた。

限定されてある〈場〉は、オーウェルの場合、自律的個人の居る〈場〉、現に作品を書いている〈場〉、過去の広々とした世界に通じる〈場〉、「正しい世界観」の持主よりすれば、「狂つた世界観」の支配する〈場〉である。けれどもそれは、主観的感情の歪められる事のない〈場〉であり、ここでは、知的誠実という語は、その意味を十全に孕んで手応えあるものとなつてゐる。

一方、世界を狭く限る事の意味合いに一顧だに与えない手合、未来にのみ想像力を働かせる手合は、過去に生きる術を知らぬが故に、不安や恐怖に駆られ、己れの不安や恐怖を未来に投射し、未来の雰囲気を取らぬ先取りし、「異端狩り」と自己検閲に精を出し、かくて全体主義の雰囲気醸成に一役買う事になる。「全体主義によって腐敗させられる為には何も全体主義国に住むには及ばない」というオーウェルの言葉がここで思い起されるのだが、オーウ

エルが述べたいま一つの言葉も同様に読者の耳に蘇るのだ。「長い目で見ると、知識人の自由に対する欲求の衰弱が最も深刻な徴候である。」⁽⁹⁶⁾自由への欲求を衰弱させる知識人は、「広い」世界に住んでいるのを自負し、知的誠実を論じて、これを「一種の反社会的利己主義」と決めつけ、文学の自律性を取り上げて、これを「象牙の塔」と称し、これを嘲罵を浴びせかけるのを義務と心得るわけだが、オーウェルの心中では、「知的誠実に対する直接的、意識的な攻撃は、知識人達によって仕掛けられる」という確信は、いよいよ深まっていくばかりであった。

註

- (1) George Orwell, *Nineteen Eighty-Four*, London: Secker & Warburg, 1949, p. 181.
- (2) Robert Nisbet, '1984 and the Conservative Imagination', in *1984 Revisited Totalitarianism in Our Century*. Edited by Irving Howe, New York: Harper & Row, Perennial Library, 1983, p. 180.
- (3) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. II, London: Secker & Warburg, 1968, p. 16.
- (4) *Ibid.*, p. 16.
- (5) T. E. Hulme, *Speculations*, First published 1924, published as a Routledge paperback (London: Routledge Kegan Paul), 1960, p. 47.
- (6) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. III, London: Secker & Warburg, 1968, p. 244.
- (7) T. E. Hulme, *Speculations*, op. cit., p. 47.
- (8) Hugh Thomas, *New Statesman*, 20 April 1962, p. 568. Reprinted in *George Orwell The Critical Heritage*. Edited by Jeffrey Meyers, London: Routledge & Kegan Paul, 1975, p. 150.
- (9) Herbert Matthews, *Nation*, 27 December 1952. Reprinted in *George Orwell The Critical Heritage*, op. cit., p. 144.
- (10) George Orwell, *Homage to Catalonia*, London: Secker & Warburg. First published 1938, New edition, reset, 1951, p. 110.
- (11) *Ibid.*, p. 112.

- (12) *Ibid.*, p. 84.
- (13) *Ibid.*, p. 85.
- (14) *Ibid.*, p. 111.
- (15) *Ibid.*, p. 114.
- (16) *Ibid.*, p. 139.
- (17) *Ibid.*, p. 145.
- (18) *Ibid.*, p. 149.
- (19) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell, Vol. II*, op. cit., p. 256.
- (20) George Orwell, *Homage to Catalonia*, op. cit., p. 157.
- (21) *Ibid.*, p. 157.
- (22) Julian Symons, *The Thirties A Dream Revolted*, Revised edition (First published in 1960 by The Cresset Press) London : Faber and Faber, 1975, p. 115.
- (23) *Ibid.*, p. 115.
- (24) *Ibid.*, p. 120.
- (25) George Orwell, *Homage to Catalonia*, p. 168.
- (26) *Ibid.*, p. 188.
- (27) *Ibid.*, p. 209.
- (28) *Ibid.*, p. 209.
- (29) *Ibid.*, p. 209.
- (30) *Ibid.*, p. 212.
- (31) *Ibid.*, p. 213.
- (32) *Ibid.*, p. 211.
- (33) Robert A. Lee, *Orwell's Fiction*, Notre Dame : University of Notre Dame Press, 1969, p. 70.
- (34) George Orwell, *Homage to Catalonia*, P. 193.
- (35) *Ibid.*, p. 193.
- (36) *Ibid.*, p. 194.
- (37) *Ibid.*, pp. 194~195.

- (38) A. J. P. Taylor: *English History 1914-1945*, London: Oxford University Press, 1965, p.395.
- (39) George Orwell, *Homage to Catalonia*, p.201.
- (40) *Ibid.*, p.228.
- (41) *Ibid.*, p.216.
- (42) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell, Vol. III*, op. cit., p.200.
- (43) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell, Vol. I*, op. cit., p.275.
- (44) *Ibid.*, p.300.
- (45) *Ibid.*, p.334.
- (46) George Orwell, *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell, Vol. IV*, op. cit., p.16.
- (47) George Orwell, *Coming Up for Air*, First published 1939 by Victor Gollancz, published in London by Secker & Warburg, 1948, p.27.
- (48) *Ibid.*, p.151.
- (49) *Ibid.*, p.151.
- (50) *Ibid.*, p.153.
- (51) *Ibid.*, p.152.
- (52) *Ibid.*, p.148.
- (53) *Ibid.*, pp.148~149.
- (54) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell, Vol. I*, pp.367~368.
- (55) *Ibid.*, p.368.
- (56) *Ibid.*, p.382.
- (57) *Ibid.*, p.368.
- (58) George Orwell, *Coming Up for Air*, p.50.
- (59) *Ibid.*, p.50.
- (60) *Ibid.*, p.50.
- (61) *Ibid.*, p.50.
- (62) *Ibid.*, pp.50~51.
- (63) *Ibid.*, p.99.

- (64) *Ibid.*, p. 56.
- (65) *Ibid.*, p. 108.
- (66) *Ibid.*, p. 108.
- (67) *Ibid.*, p. 109.
- (68) *Ibid.*, p. 110.
- (69) *Ibid.*, p. 110.
- (70) *Ibid.*, p. 38.
- (71) *Ibid.*, p. 31.
- (72) *Ibid.*, p. 75.
- (73) *Ibid.*, p. 76.
- (74) *Ibid.*, p. 76.
- (75) *Ibid.*, p. 76.
- (76) *Ibid.*, p. 79.
- (77) *Ibid.*, p. 166.
- (78) Friedrich Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke, Alfred Kröner Verlag, 1976, p. 34.
- (79) George Orwell, *Coming Up for Air*, p. 167.
- (80) *Ibid.*, p. 167.
- (81) *Ibid.*, p. 167.
- (82) *Ibid.*, p. 168.
- (83) *Ibid.*, p. 161.
- (84) *Ibid.*, p. 163.
- (85) Robert A. Lee, *Orwell's Fiction*, op. cit., p. 102.
- (86) George Orwell, *Coming Up for Air*, p. 179.
- (87) *Ibid.*, p. 213.
- (88) Robert A. Lee, *Orwell's Fiction*, p. 104.
- (89) George Orwell, *Coming Up for Air*, P. 140.
- (90) *Ibid.*, p. 140.

- (16) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. IV, p. 51.
- (26) George Orwell, *Coming Up for Air*, p. 24.
- (93) 三沢佳子訳・解説——『牧師の娘』御茶の水書房、一九七九年、三一—一頁。
- (46) Johann Wolfgang Goethe, *Gespräche mit Goethe*, Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche, Artemis Verlag Zürich und München, p. 155.
- (98) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. IV, p. 67.
- (96) *Ibid.*, p. 64.
- (56) *Ibid.*, p. 70.